

日本女子大学の展開

— 女子総合大学を目指して — (上)

片桐芳雄*

Development of Japan Women's University (JWU) :
Aiming at the Women's University 1

Katagiri Yoshio

1. 原型としての梅花女学校改革

成瀬仁蔵が留学したころの米国では、カレッジのほかに、高度の研究や専門職養成を目的とする新たなユニヴァーシティが、続々と創設されていた。このような動向を知った成瀬は、自ら創設する女子大学は、カレッジではなくユニヴァーシティであることを夢見た。タッカー教授に学んだ、幅広い「女性の領域」(Woman's Sphere)に対応して、総合的な分野を擁する、女性のためのユニヴァーシティである⁽¹⁾。

1894年1月に帰国した成瀬仁蔵は、梅花女学校の校長就任後の7月、『梅花女学校々則・附教育要領』(以下『校則』と略記)という改革案を発表した⁽²⁾。梅花女学校の大学化をも視野に入れた専門科構想は、のちの日本女子大学の原型となった。

同じくキリスト教系女学校であった神戸女学院が、リベラル・アーツによる人格教育を行なうカレッジを目指したのに対して、成瀬は、専門教育を行なうユニヴァーシティを目指したのだった。

修業年限4年の普通科の上に置く専門科は、「家政部」「教育学部」「文学部」「音楽部」の4つからなり、神戸女学院の、文科・理科に二分された高等科とは、性格が異なっていた。専門科では、賢母良妻にとどまらず、社会の改良・発展に役立つ、専門性を持った人材を育てようとしたのであった。

四つの専門科の学科目構成は、以下の通りである。いささか長くなるが、全文引用しよう。

○専門科家政部

＜家政部専修の課程＞

一世態学(結婚、男女交際、離婚、法律、社会倫理、慈善事業、交際法等を研究せしむ)

一家政学

(一) 家庭教育(教育原理、小児発育の順序、小児取扱法、玩弄物、小児の食物、実地観察等)

(二) 家庭経済(家庭の順序、家事の注意、勤勉、掃除、家計簿記、家内の快樂等を研究す)

(三) 家庭衛生及看病法

(四) 家庭美術(装飾術、画学、音楽、審美学、等を学ばしむ)

(五) 家政雑事(洗濯に関する一切の理論及実地、料理其他凡ての家政雑事を授く)

(六) 心理学

一小児学

△一博物学

△一理化学(食品化学、造営学、什器、丁園術等を研究す)

△一生理及衛生

附属商業部＜家政学兼修の課程＞

△一商用作文

△一商業算術

△一商業簿記

△一商業経済

△一商業地理

△一商業学

△一商業上の諸法律

△一商業実習

* 日本女子大学名誉教授

凡て△の記号を附するものは撰修科にして家政学と商業部を兼習するものは博物理化生理衛生等の学科ハ修めざるものとす

○専門科教育学部

- 一社会倫理学
- 一応用心理学
- 一生理学
- 一教育学（教育原理、三育の理論、学科課程論、教授の原則、教授観察批評、学校衛生、教場器具等）
- 一教育史（日本・万国教育史（太古・中古・近世）学校組織）
- 一教育文学（内外の大家）
- 一教育制度（日本教育制度、欧米に於る教育制度）
- 一女子教育
- 一家庭教育
- 一小児学（実地観察及理論）
- 一家政学
- 一実習
- 一英文学（撰修）

○専門科文学部

- 一邦文学（文学、文学史）
- 一支那文学
- 一英文学（文学、文学史）
- 一歴史
- 一哲学史
- 一教育学
- 一家政学
- 一心理学
- 一実地演習

○専門科音楽部

- 一声楽
- 一楽器
 - (一) 琴
 - (二) 洋琴
 - (三) 風琴
- 一音楽論（講義、読書）
- 一音楽史（同上）
- 一英文学（撰修）
- 一和文学（撰修）

まず家政部について見ると、女性が当面する男女交際や結婚・離婚等、社会問題を研究する「世態学」を筆頭に置き、ついで、教育・経済・衛生等、家庭に関わる諸事項を「家政学」として一括した。

注1にあげた別稿でも述べたように、成瀬が留学した当時の米国では、家政学が形成途上にあった。成瀬が滞在した東部の女子カレッジでも家政学への動きは鈍かった。成瀬自身、家政学への関心は持っていたが、少なくとも留学半ばの1892年5月28日にボストンのYMCAを訪問したころは、まだ、具体的な構想を得るには至らなかった⁽³⁾。

しかし「校則」に示された家政学の学科目構成は、常見育男が「日本において『科学としての家政学の範囲』について、最も早く発表された試論⁽⁴⁾」と評するに値するものであろう。とは言え、これがどのように構想されたのかは不明である。

3年間の米国留学において、その動向が資料的に跡づけられない後半の1年あまりの期間に、帰国後の女子大学創設を明確な目標とした成瀬が、その大学の核になる家政学をさまざまな情報をもとに構想したことは考えられる。あるいは、成瀬の女子大創設の決意を知った麻生正蔵が、日本で、いろいろな情報を収集して、このような構想を得るに至ったのかもしれない。しかしいずれも推測の域を出ない。

いずれにせよ、この家政学構想は、他の一般の女学校の、裁縫などの実技を主とする家事科の内容とは全く異なり、より広い視野から、家庭をめぐる諸課題を捉えることを目指し、多様な内容をカバーしている点で、注目すべきものであることは確かである。

「家政部」という名称の学科を設置すること自体、日本では初めてのことであった。また、家政部に「附属商業部」なるものを設置したことも、注目すべきであった。

他方、教育学部の学科目構成も「社会倫理学」「応用心理学」「生理学」などを含め、幅広い。単に、女学校教員の養成だけではなく、より広く、家庭教育や慈善活動の分野で「先導者」となることのできる人材を育成しようとしたのであろう。

この他、文学部や音楽部においても、文学部では、文学のほかには家政学や心理学を含み、また音楽部では、英文学や和文学を含めるなど、全体としても、幅広い視野に基づく学科目が用意されているこ

とが注目される。

このような、「視野の広い専門重視」という、いささか欲張った教育方針こそ、成瀬が米国で夢見たユニヴァーシティとしての女子大学、すなわち Women's University が目指すものであった。

以上の校則改正は、9月10日から実施することにしたが⁽⁵⁾、そのいささか強引なやり方が生徒たちの反発を買ったこともあり、実現はしなかった⁽⁶⁾。

2. Women's University に向けて

梅花女学校の大学化に頓挫した成瀬は、それとは別に、新たな女子大学の創設を考え始めた。1896年2月に出版した『女子教育』は、そのための世論喚起の書であった。

成瀬はここで、女子教育にとって、知育を中心とする普通教育（ジェネラル・エデュケーション）が重要だと主張するとともに、大学においては、「専門の業を得るの便を開く」ための、「専門教育」（プロフェッショナル・エデュケーション）が必要であることを訴えた。

「高等普通教育の女子に必要なは、既に吾人の論述せし所によりて明白なりと雖も、（高等女学校の・片桐）四ヶ年の普通学科を卒へたればとて、未だ一芸にも、一能にも熟達せるには非ず。換言せば未だ半出来の人間にして一人前の人たるにあらず、故に余は修業年限三ヶ年位の一種の大学を起し、最高等の教育を受く可き資格ある女子の爲めに専門の業を得るの便を開くの必要あるを信ずる者也。⁽⁷⁾」（114：89、傍点・原文）

その上で成瀬は、創設する女子大学の学部とその学科目を、「今試に其部門の大要を列举すれば」として、以下のように示した。これが、上述の梅花女学校改革案を踏襲したものであることは、明らかである。

「○家政部：

世態学、家庭教育学、経済学、家庭衛生学、看病学、家庭美術、心理学、小児学、博物学、食品化学、生理学、衛生学、実習。

○教育部：

社会学、応用心理学、生理学、教育学、教育史、教育文学、教育制度、女子教育学、家庭教育、小児学、家政学、文学、実習。

○文学部：

邦文学、支那文学、英文学、歴史、哲学史、教育学、家政学、心理学、実地演習。

○音楽部：

音楽、楽器、音楽論、音楽史、和文学、英文学。

事宜に応じては、

○理化学部 ○商業学部 ○体操学部

○美術学部

等を加ふるも亦可なるへし。」（115-116：90）

ついで同年6月、麻生正蔵は、女子大学創設の本格的活動のために、成瀬の意を受けて「日本女子大学設立之趣旨草稿」を起草した⁽⁸⁾。

ここには、「大学部」として、「教育部」「文学科」「家政科」「体育科」「商業科」「理学科」「音楽科」「美術科」の8科が列挙されたが、成瀬記念館所蔵の資料には、さらに麻生の筆により、「工芸科」と「医学科—小児科」が書き込まれ、「教育部」には「理科、文科」、「文学科」には「国文科、英文科」が付記されている。成瀬や麻生が、いかに、幅広い分野をカバーする大学を夢見ていたかが、分かる。

同時にこの「草稿」で注目すべきは、「附属部」として「幼稚園」「小学校」「高等女学校」が記されていることである。当時、慶応義塾に、小学校に相当する「幼稚舎」はあったが、幼稚園から大学までの一貫教育のシステムを持つ学校はなかった⁽⁹⁾。

9月、成稿なった「日本女子大学校設立之趣旨」では、日本女子大学校の本校として「家政部」「文学部（甲種、乙種）」「教育部（文科、理科）」「理科部」「体育部」「音楽部」「美術部」、附属の「普通」として「幼稚園」「小学校」「高等女学校」のほか、さらに、「専門」として「工芸部」「商業部」「看病学部」が挙げられた⁽¹⁰⁾。まさしく、前代未聞・空前絶後、と言いたくなるような壮大な構想だった。

さらに『成瀬先生傳』が、96年末に印刷配布したとする趣旨書では、「家政部」は「家政学部」と記されて、文学部の位置には「国文学部」「英文学部」「仏文学部」が並記され、逆に、「専門」の中から「看病学部」が削除された⁽¹¹⁾。ここに初めて、「家政学部」の名称が登場したのであった。

このような試行錯誤を経て、1900年11月に東京府知事宛てに提出された設立願書の「日本女子大学校

規則」第6条「学部」には、次のように記された⁽¹²⁾。

「本科ヲ分テ家政部文学部教育部体育部美術部音楽部理化部トス

但シ初学年度ニハ本科ノ家政文学ノ両学部ヲ設置シ時宜ニ応シテ他学部及研究科ニ及スモノトス。」

そして第7条「科目」は以下の通りである。

「第一 家政部ノ科目

必修科目 倫理及社会学 心理及教育 生理及衛生 経済及法制 応用理化 家政及芸術 体操

選修科目 国文 漢文 英語 仏語 歴史 美術史 哲学及哲学史 音楽 図画 教授法

第二 文学部ヲ分テ国文学部英文学部トス

一 国文学部ノ科目

必修科目 倫理及社会学 心理及教育 国文 漢文 美術史 哲学及哲学史 歴史 体操

選修科目 生理及衛生 経済及法制 応用理化 家政及芸術 歴史 英語 仏語 音楽 図画 教授法

一 英文学部ノ科目

必修科目 倫理及社会学 心理及教育 英語 国文 美術史 哲学及哲学史 歴史 体操

選修科目 生理及衛生 応用理化 家政及芸術 国文 漢文 仏語 歴史 音楽 図画 教授法」

ついで第13条が示す各学部必修科目の学科課程は、次の通りである。

「第一 家政部ノ学科課程

倫理及社会学

実践倫理 倫理学 実践社会学

心理及教育

心理学 教育学 保育学 家庭教育 児童研究 童話研究

生理及衛生

生理学 衛生学 家庭衛生 婦人衛生 社会衛生 看病学

応用理化

家庭応用理化

家政及芸術

衣 食 住 社交 女礼 家庭美術 園

芸等

経済及法制

経済学 家庭経済 帝国憲法 民法及び諸法規

体操

普通体操 遊戯体操 教育体操 容儀体操

第二 国文学部ノ学科課程

倫理及社会学（家政部と同じ・片桐）

心理及教育（同上）

国文

散文美文講読 作文作歌 文典 修辭学 文学史

漢文

経書史文講読

美術史

美術史一班

哲学及哲学史

哲学総論 哲学史

歴史

国史

体操（家政部と同じ・片桐）

第三 英文学部ノ学科課程

倫理及社会学（家政部と同じ・片桐）

心理及教育（同上）

英語

散文美文講読 作文 文典 修辭学 文学史

国文

講読 文法

美術史（国文学部と同じ・片桐）

哲学及哲学史（同上）

歴史

外国史

体操（家政部と同じ・片桐）

このように、構想段階で多数の学部名があがったが、結局のところ、日本女子大学校は、家政、国文、英文の3学部でスタートすることになった。財政事情や大学の規模等、さまざまな条件を考慮すれば、やむを得ないことであった。

そして注目すべきは、3学部共通の必修科目として「倫理及社会学」「心理及教育」「体操」を置き、選修科目では「国文」「漢文」「英語」「仏語」「歴

史」「哲学及哲学史」「教授法」「音楽」「図画」が共通科目となっていることである。

3学部共通して普通教育（ジェネラル・エデュケーション）を基盤とし、その上で専門教育を目指している。『女子教育』において、知育を中心とする普通教育の重要性を力説したことの反映である。

さらに第13条の学科課程を見てみると、家政部の教育内容が、梅花女学校校則で示されたものに比して、社会的、あるいは科学的な基盤を持ち、学問的にも整理されていることに気づく。同様のことは、国文学部、英文学部でも言える。

そして家政部で、「国文」「哲学及哲学史」「歴史」などの文学部の必修科目が、逆に文学部で、「生理及衛生」「経済及法規」「応用理化」「家政及芸術」などの家政部の必修科目が、相互に、選修科目として取り入れられている。幅広い知識の習得が重視されていたことが明らかである⁽¹³⁾。

3. 「一大飛躍」

教育学部の創設

『成瀬先生傳』は、「組織の変更、内容の充実を以て一大飛躍を示したのは、明治三十八年（1905年・片桐）であった。⁽¹⁴⁾」と述べる。

事実、前年12月15日、家政、国文、英文に続く第4番目の学部として、教育学部の開設が発表された。この発表式は、成瀬、大隈重信、米国公使、渋沢栄一の演説ほか、久保田譲文部大臣の祝辞が朗読されるなど、開校式以来の、華やいだ式典となった。成瀬はそこで、教育学部開設に至る経緯を詳しく述べた⁽¹⁵⁾。

教育学部開設の基金を提供したのは、実業家・森村市左衛門であった。大学創設以来積極的な協力を惜しまなかった森村は、早世した弟豊と息子明六を悼み、その名を冠した森村豊明会を設立し、その基金の提供を成瀬に申し出たのであった。

この意を受けて成瀬は、同年12月9日発行の『学報』第4号に「第二維新を論じて我国教育の宿弊に及ぶ」（以下「第二維新論」）という論文を発表した⁽¹⁶⁾。

この論文は、2月に勃発した日露戦争の興奮に沸き立つ社会状況のなかで、戦争には、武力によるもののほか、「世界的商工業の戦争」「知力の戦争」

「天然（自然・片桐）を征服する戦争」「精神的社会的戦争」があると論じ、これら五つの戦争に勝利するには根本的な教育改革が必要だ、と訴えるものだった。

そして成瀬は、「記憶に依頼する試験的学問の弊」を指摘し、「形式的、抽象的」な教育を批判して「社会、家庭、学校を連絡」する教育の必要を訴え、「選択の自由、研究の自由」を重視して「研究的私立学校を組織する」ことや、「天然の良教師たる女子の教育家を輩出」することの重要性を主張した。

かくして翌1905年4月に校舎建設が起工され、翌06年4月、教育学部が開設された。この時同時に、教育研究のために、附属の豊明小学校と豊明幼稚園が創設されたのだった。

教育学部の創設は、東京府知事宛て設立願書の「日本女子大学校規則」に「時宜ニ応シテ」「及ス」としたものの実現であり、附属小学校と幼稚園の創設は、「日本女子大学校設立之趣旨」に示された壮大な構想の具体化だった。1903年4月に発会した同窓組織の桜楓会と相まって、幼稚園から大学、さらには大学後教育に至る一貫教育の体制が整えられた。

教育学部は自然科学に重点を置いた。内を二つの専攻に分け、第1部を数学・物理化学専攻、第2部を博物専攻として、必修科目週25時間のうち各10時間をこれに当てた。教育学部開設によって、文系のみならず、理系の学部が設置され、名実ともにユニヴァーシティ（総合大学）の体制を整えた。

1905年12月、成瀬は「日本女子大学校の教育方針に就て」という演説を行い⁽¹⁷⁾、その中で幼稚園から高等女学校に至る教育内容を、「道徳的教育」「科学的教育」「経済的及国家的教育」の三つに分類して論じた⁽¹⁸⁾。成瀬は、教育学部の設置によって、「科学的教育」の対応できる教員の養成をも目指したのだった。

同時に成瀬は、この演説において、「学生をして其の学ぶ所のものは、自ら之を實行して、自動的発表、構成の才能を養はしむることは本校の専ら意を注ぐ所⁽¹⁹⁾」（傍点・『家庭週報』第44号）と、年来の主張である自学自動主義的教育によって、新たな教育体制を構築する必要を述べた。これは前年12月に発表した「第二維新論」で主張した教育論の具体化であった。

附属学校においては、教育内容を三つに分類して、さらに、そのそれぞれを、「材料」と「発表的・構成的(自動)」の二つに分けた。「材料」は、系統的な知識の提示であり、「発表的・構成的(自動)」は、活動を重視したものであった。成瀬によれば、自然教育と手工教育により「各材料を自然と社会とに求め、自動を以て発表し、構成せしめ、以て実地に活用すべき教育を施さんとする⁽²⁰⁾」のであった。

その教育内容を、高等女学校について見ると、次のようである。

高等女学校

及国家的 的教育		教育 科学的		教育 道德的		
構成的 (自動)	境(四開) 遇(材料)	構成的 (自動)	材(自然) 料(界)	構成的 (自動)	材(人倫) 料的	
習字、手工、必要品ノ製作、器械構 成(説明用) 図画、図案、裁縫	繪本 商工業、需要供給、国家、国民義務、 労働分	算術、地理、地球儀使用、航海等計 画、園芸、牧畜、養蚕、実験、記述 及記録、音楽、体操	本邦地理、自然物、氣候、天気、雲 風等、天体、色彩、身体、動植物、 繪本	国語、講読作文、習字、談話、英語、 字引使用、詩歌暗誦、体操、音楽	歴史小説、旅行、日記、簿記、文集、 詩歌、文明史、家庭学校社会ノ關係、 繪本	第一年
同上	同上	同上	同上	同上	同上	第二年
同上	同上	同上	同上	同上	同上	第三年
同上	同上	同上	同上	同上	同上	第四年
同上	同上	同上	同上	同上	同上	第五年

附属高等女学校の教育内容構成⁽²¹⁾

このようにして自学自動主義の教育は、幼稚園から大学までの教育を貫く基本的な思想となった。

高等女学校では1907年4月から、教室を学科別にして自学の方法を取り入れ、1915年4月からは学科別教室制を廃止し、個人的研究の時間を置いて自学の徹底を図り、さらに1924年度にはドルトン

プランを導入した⁽²²⁾。

豊明小学校では、成瀬の意を受けて、1911年に河野清丸が主任(のち主事)として招聘され、自動教育を実践した。河野は、モンテッソーリ教育法を紹介し、大正自由教育運動の頂点とも言える1921年の八大教育主張講演会で「自動主義の教育」を講演するなど、運動の中心として活動した⁽²³⁾。

豊明幼稚園は、1906年に初代主任として甲賀ふじが就任した。米国留学中に麻生正蔵と知り合い、その要請によって帰国後すぐに着任した甲賀は、シカゴ大学教育学部で学んだフレーベル・メソッドを実践し、モンテッソーリ法も導入した⁽²⁴⁾。

このように幼稚園から大学まで、自学自動教育を実践する、一大学園が創設されたのである。

1904年12月15日、教育学部開設発表式の日、日本女子大学校は財団法人となった⁽²⁵⁾。

そしてそれに先立つ1904年2月27日には、前年4月1日に施行された専門学校令に基づき、日本最初の女子専門学校としての認可が官報に告示され、女子高等教育機関としての制度的地位を確立した⁽²⁶⁾。専門学校令第1条は「高等ノ學術技芸ヲ教授スル学校ハ専門学校トス」と規定し、慶應義塾大学部や早稲田大学等、のちに主要な私立大学に発展する学校が、こぞってこの認可を受けたのだった。

まさしく『成瀬先生傳』が記すように、1905年は、日本女子大学校の「一大飛躍」の年だったのである。

『家庭週報』第15号(1905年1月15日)は、附属の幼稚園や小学校とともに、その理想の姿を、「教への庭」と題して、紙面いっぱい描いた。

国文学部を文学部へ

さらに日本女子大学校は、1907年、国文学部を文学部と改称した。そのねらいは、人文学(Culture History)をNature Historyに対するものと捉え、これを文学部の「最も主なる幹となる学問」とすることだった⁽²⁷⁾。

成瀬は「文学部の三要素」を、次のように述べた。

「第一、語学の力、即ち読書力を養ひて世界の精



「教への庭」(『家庭週報』第15号(1905.1.15))

神に接する事が出来、又得たる印象を発表すること。

第二、思考力を養ひ、世界の大勢に接して感動を受けること。

第三、養うた思考力を言語なり又筆によりて発表する。此の三つの要素、これが課目の改良案である。これは今年四月に入学する級より実施するのであります。⁽²⁸⁾

「世界の精神」「世界の大事」への認識とともに、「思考力」の養成が強調された。これもまた、「第二維新論」の趣旨に沿うものだった。

そして同時に発表された「日本女子大学校大学一部の改称及び組織変更」という文書では、改革の趣旨を次のように述べた。

「従来の国文学部は、国文を専攻する事に重きを置き、殆ど其の為に七時間乃至八時間を充てたが、今回は国語及び国文と英語の時間とを殆ど平行せしめ、文学として和、漢、洋の大意に通ぜしめ、これを文学史によりて系統を附し、文学と他の学課との統一を計る為に、人文史を課す。人文史は文学部に於ける中心点たるを以て、比較的多くの時間をこれに割きたり。⁽²⁹⁾

事実、提示された文学部の課程表では、従来の

「国文」が「国語・国文」となって、第一学年では変わらなかったが、第二学年で週当たり4時間、第三学年で週当たり2時間が減じられて週5時間の「英語」とほぼ同等になり、逆に従来「国史」が週2時間のみだった歴史は、日本・東洋・西洋にわたり第一学年で週8時間、第二学年で週4時間となった。さらに「人文史」は、これも日本・東洋・西洋にわたり第二学年で週6時間、第三学年で週10時間が当てられた。

このように「歴史」と「人文史」を合せると、各学年で週8～10時間充たされることとなり、文字通りこれが、文学部の「中心点」となった。そして、従来「国史」のみだったのが、東洋・西洋にも広げられ、成瀬の言う「文学部の三要素」の方針が具体化された⁽³⁰⁾。

『四拾年史』によれば、専ら人文史を講述したのはドイツに留学してドイツ文献学を学んだ国文学者の東京帝国大学教授芳賀矢一だったというが⁽³¹⁾、当時の「学校規則」を見ると、芳賀は「本邦人文史」の担当者として名前が見え、「西洋人文史」の担当は、東京帝国大学助教授で新進気鋭の西洋史研究者村川堅固であったことが知られる。

この文学部構想のように、「世界の大事」を知っ

て思考力を養おうとする姿勢は、世界主義を標榜して、国文よりも英語教育を重視すべしと主張していた西園寺公望にも通じるものであった⁽³²⁾。

以上のような、女子大学の新たな教育体制について、成瀬は、1908年6月、桜楓会の会報『花紅葉』第6号に「各部の使命」と題する長文を載せ、その基本的理念を説明した。それは、人類の歴史を、自由と束縛の二つの潮流が絶えず衝突・矛盾する歴史として描き出し、教育・文・家政の三学部は、束縛を脱し、自由な世界を形成する使命があると説く、高い理想に満ちたものだった。

成瀬は、文章の後段で次のようにのべた。

「教育部に向つては教育の自由を、文学部には思想の自由、家政部に対しては婦人に自由を与へなければならぬと云ふ事を申したが、之は此の三方面から力を協せて開かなければ、人間に真の自由を与へ、世界の文明を進める事は出来ないのである。そこで最後に於て私が切にあなた方に望む所は、我が国家に自由を与へ、人類に自由を与へる事である。⁽³³⁾」

そして、次のようにこの文章を結んだ。

「敢へて我が国民の為ではない。自ら与へられたるあなたの使命の為に、自ら任じて起ち、如何なる惨憺苦心をしても、是非あなた方は之を成就しなければならぬ。之は実に困難な、力に余る事であるが、然し私は、あなた方が瞬時も忘れず此の使命に奉仕し、生涯努めて已まないならば、慥に成就し得べき事を信じて疑はないのである。⁽³⁴⁾」

これも「第二維新論」の趣旨に基づいて、三学部の使命を論じたものであった。

挫折

しかし、成瀬によって主導された日本女子大学の「一大飛躍」は、その期待に反して、大きな壁にぶつかった。教育学部については、自然科学方面の教員需要は期待したほど多くなく、中等教員無試験検定資格を取得できなかった。文学部は、あまりに理想主義的であった。

1910年4月、教育学部は、従来の理系2専攻のほか、家政科と文科の計4科を置いたが、結局のところ理系2専攻は募集を停止した。そして改めて家政科の中に、物理化学数学に重点を置く第1部

と、裁縫に力点を置く第2部を開設した。1911年3月には、この年の家政科卒業生から、家事科中等教員無試験検定資格が認可され、こうして教育学部は、設立当初のねらいとは異なり、家事科教員養成を主とする学部となった⁽³⁵⁾。

他方文学部は、より悲惨で、1912年4月に募集停止となり、1917年4月国文学部が復活した⁽³⁶⁾。

この時代を、『四拾年史』は「女子高等教育最寒時代」と記す⁽³⁷⁾。日露戦争後、自由主義、個人主義の抬頭を恐れて1908年10月に戊申證書が発布され、教育の国家主義的再編が進行した。家族国家論が強調され、家を守る女性に高等教育は不必要だとの主張が喧伝された。こうした社会状況のもとで、全学部の入学者数は、1906年の359名から1912年の151名へと激減したのだった⁽³⁸⁾。

教育学部の創設と文学部の改革にかけた成瀬の理想は、時代の逆風もあって挫折した、と言わざるを得ない。成瀬はこの間の事情について、何も語っていないが、ここに成瀬の失意の深さが表れている、と言えるのではなからうか。

注

- (1) 成瀬が、カレッジではなく、ユニヴァーシティの創設を目指したことは、別稿「成瀬仁蔵の女子大学構想—Women's Universityの夢—」（『愛知教育大学研究報告（教育科学編）』第69輯、2020年3月刊行予定）で述べた。
- (2) 日本女子大学成瀬記念館所蔵。なおこの校則につき麻生正蔵は、これは成瀬との「合作」であり、執筆者は自分であったと述べている（麻生正蔵「同志社教育から日本女子大学校教育へ（上）」（『丁酉倫理会倫理講演集』第415輯、1942年5月。『麻生正蔵著作集』（日本女子大学成瀬記念館、1992年）836頁）。
- (3) 小林陽子「成瀬仁蔵の蔵書調査（第2報）—カタログ・シラバスなどの資料の概要—」（『地域学論集』鳥取大学地域学部紀要3（3）、2007年3月）
- (4) 常見育男『家政学成立史』（光生館、1971年）70頁。
- (5) 『女学雑誌』第390号（1894年7月28日）所載の梅花女学校広告。
- (6) 『梅花学園九十年小史』（梅花学園、1968年）

77-78頁。

- (7) 『女子教育』からの引用頁は（原本：『成瀬仁蔵著作集』（以下『著作集』）第1巻、日本女子大学、1974年）の順で表記する。
- (8) 1896年6月19日付麻生正蔵宛て成瀬書簡（『成瀬仁蔵書簡集1』成瀬記念館、2019年）参照。なお『著作集』第3巻（日本女子大学、1981年）で同書簡の発信年が1895年となっているため、拙稿「胸突き八丁の成瀬仁蔵―婦国から日本女子大学創設まで―」（『人間研究』第55号、2019年）では、疑問を抱きながら「趣旨草稿」の作成を1895年6月としたが、これは誤り。「日本女子大学設立之趣旨草稿」は成瀬記念館所蔵。
- (9) 慶應義塾幼稚舎は、1874年に福沢諭吉門下の和田義郎によって和田個人の私塾として設立され、1897年10月、正式に慶應義塾附属の小学校となった（『慶應義塾百年史・上巻』（慶應義塾、1958年）544頁、同・中巻（前）（同、1960年）134頁）。また同志社には、1897年に、女性宣教師によって幼稚園が設立されたが、経営が難航し、結局、正式に同志社の附属校にはならなかった（『同志社百年史・通史編一』（同志社、1979年）552-557頁）。もとより官立の高等女子師範学校には当初から附属の幼稚園、小学校、高等女学校があったが、私立の大学が幼稚園から高校までの附属校をもつようになるのは、戦後のことである。
- (10) 『著作集』第1巻229頁。『日本女子大学四拾年史』（以下『四拾年史』。日本女子大学、1942年）40-41頁。なおここで文学部の甲種・乙種の内容は不明だが、その後を考えると「国文」系と「英文」系のことだったと思われる。
- (11) 仁科節編『成瀬先生傳』（桜楓会出版部、1928年）184頁。なお同じ文書が、1911年4月の創立10周年を期して刊行された『日本女子大学の過去現在及び将来』にも引用されている（17-18頁）。
- (12) 『日本女子大学史資料集第十ー（一）・東京都公文書館所蔵日本女子大学関係史料〔1900年－1916年〕』（成瀬記念館、2007年）18頁。

ちなみに、この規則では「家政部」の語が使用されている。なお設立願書提出に先立って10月3日に公表された「日本女子大学校規則」では、「日本女子大学校教育の要旨」の「組織」の項に、「本校完成の暁に於ける組織」と断ったうえで、「本校」の「本科」として、「家政学部」「文学部（国文学部、英文学部、仏文学部）」「教育部（文科、理科）」「体育部」「音楽部」「美術部」「理科部」の7部を、「附属」の「専門」として、「工芸部」「商業部」の2部が記されている（『日本女子大学史資料集第五・日本女子大学校規則〔明治三三年〕』（成瀬記念館、1998年）4-5頁）。

- (13) 成瀬自ら次のように述べている。「個人としても唯々専門の学課に偏して他を顧みざるが如きは、決して喜ぶべき傾向にあらざるを以て、此弊に陥らざらんが為に家政部に在りては、歴史、哲学、文学等を選修せしめ、又文学部に在りては、理科、経済、家政、芸術等を選修せしめ、以て其の趣味を広からしむると共に、実用の重んずべきを忘れざらしめ、其の性情を円満に発達せしめん事は、吾人の最も力むる所なりとす。」「（『我が校の教育方針に就て』『家庭週報』第20号1905年3月25日、『著作集』第2巻485頁）
- (14) 前掲『成瀬先生傳』210頁。
- (15) この発表式の様子は、成瀬の演説を含め、『家庭週報』第14号（1904年12月31日）に詳しく掲載された。成瀬の演説は『著作集』第2巻に「日本女子大学校設立披露式に於て」と題して収載されている。
- (16) 『著作集』第2巻収載。但し『学報』第4号の発行月を10月とするが、これは誤り。なお『成瀬先生傳』210頁、およびそれに基づいたと思われる『四拾年史』110頁は、この論文が同年10月の『教育時論』にまず掲載されたとするが、該当論文は『教育時論』に存在しない。
- (17) 『家庭週報』第44号（1905年12月23日）『著作集』第2巻収載。
- (18) このように、幼児から成人に至る教育の内容を三つに分類する考え方は、1909年に出版されて版を重ねた内田正孝編『家庭の葉・婦人

文庫』（大日本家政学会）に、成瀬が執筆した「教育の巻」でも論じられているが、ここでは、「科学的教育」「国家的経済的教育」「道徳的教育」と、順序と語句に多少の修正が加えられている（この著作は、『著作集』第2巻に「女子の教育」と題して収載）。また成瀬が自然教育について論じた講演として「自然と教育」（『家庭週報』第31,32号（1905年8月26日、9月9日、『著作集』第2巻所載）がある。これは改稿されて『進歩と教育』（実業之日本社、1911年）に収載された（これも『著作集』第2巻収載）。

- (19) 『著作集』第2巻592頁。
- (20) 同上594頁。
- (21) 同上596頁。
- (22) 『四拾年史』335-337頁。
- (23) 『日本女子大学学園事典』（日本女子大学、2001年）126-127頁等参照。
- (24) 同上、125、295頁等参照。
- (25) 『四拾年史』119頁。
- (26) ちなみに同じ年3月18日に女子英学塾、3月26日に青山女学院英文専門科も官報に告示され、いずれも同年4月1日から女子専門学校として認可された（当該『官報』による）。
- (27) 「成瀬校長の演説・日本女子大学第二期拡張発表式上に於て」（『家庭週報』第91号（1907年2月16日）『著作集』第2巻722頁）
- (28) 同上726頁。
- (29) 「日本女子大学校大学一部の改称及び組織変更」（前掲『家庭週報』第91号、同上727頁）
- (30) 「日本女子大学校規則」〔1907年度用〕『日本女子大学史資料集第五一（二）日本女子大学校規則〔明治三五-四二年〕』（成瀬記念館、1999年）所収）参照。
- (31) 『四拾年史』143頁。
- (32) 『西園寺公望伝』第2巻（岩波書店、1991年）209-210頁。
- (33) 『著作集』第2巻896頁。
- (34) 同上。
- (35) 『四拾年史』157頁。
- (36) 同上158頁。
- (37) 同上159頁。
- (38) 同上、巻末の付表による。